

戻る

基本情報

時間割コード/Course Code	010405
開講区分(開講学期)/Semester	秋～冬学期
曜日・時間/Day and Period	火 3
開講科目名/Course Name (Japanese)	文明動態学
教室/Room	
開講科目名(英)/Course Name	Dynamics of Cultures
定員/Capacity	0
ナンバリング/Course Numbering Code	01HUSC3A505,01HUSC3D205
必修・選択/Required/Optional	
単位数/Credits	2.0
年次/Student Year	2,3,4年
分野/Field	
担当教員/Instructor	野尻 英一

詳細情報

講義題目/Course Name	現代社会の「生」のかたちについて考える文明論的倫理学（われわれはどこから来てどこへ行くのか）Ⅰ
開講言語/Language of the Course	日本語
授業形態/Type of Class	講義科目
授業の目的と概要/Course Objective	<p>本講義の目的は、文明の動態性（社会と歴史の構造）を現代社会における人間の倫理の問題（どう生きるべきか）から理解することにある。現代文明の構造を理解するには、①われわれの倫理観や文化表象の示す特性という〈主観〉の次元から入るアプローチと、②社会・歴史の構造という〈客観〉の次元から入るアプローチがあるが、この講義は①の手法を採り、いわば文明論的な観点からの「新しい倫理学」の提起を試みる。</p> <p>倫理学の定義はさまざまであるが、いずれにしても、人はどう生きるべきかという問いに単純な回答はない。講義では学生諸君に、人の身に生じるさまざまな問題や困難に対する「感度」を養ってもらうことを目的とし、問題提起型の授業を行う。講義内容は、哲学/倫理学、表象文化論、社会理論、精神分析の手法を組み合わせたオリジナル・コンテンツである。社会問題、文学、詩歌、映像などさまざまな素材（e.g. 映画、小説、漫画、アニメ、歌謡曲）に触れながら、現代人たるわれわれの経験する生の問題を考える。同時に考えるヒントとなる思想古典（ソクラテス、デカルト、カント、ヘーゲル、ラカン、ウェーバー、フーコー、マルクス、ニーチェ等）を紹介していく。</p> <p>全講義を通して聞くと、西欧思想の基本的な展開についての理解と、それをを用いて現代社会において生きるための素養が身につく。さらに講義ではミニ・レポートの作成とその評価を通して、倫理的感度を養い自分なりに表</p>

	現する練習もおこなう。講義はすべて、プロジェクターを用いたビジュアル形式で行なう。資料のプリントも配付する。
学習目標/Learning Goals	①哲学/倫理学、表象文化論、社会理論、精神分析など人間と社会を理解するための学問の諸方法と、現代に生きる自分自身の生き方について考えることとのつながりを見いだすこと。 ②文章表現を通して思考を深め、まとめ、プレゼンテーションする能力を高める。
履修条件・受講条件/Requirement / Prerequisite	
授業計画/Class Plan	※講義順序は、当該年度の日程にあわせて変更の可能性がある。 第1回 「イントロダクション」 授業概要について 第2回 「倫理学とは何か」 普遍からの呼び声、哲学と倫理学 第3回 「映画鑑賞」 黒澤明『羅生門』を見る 第4回 「現実I」 近代哲学の発生と不思議感覚、不条理感覚 第5回 「現実II」 複合的存在としての人間 第6回 「私I」 近代的精神の運命と現代的精神の発生 第7回 「私II」 現代的精神と精神病 第8回 「《男》と《女》I」 脳における性差 第9回 「《男》と《女》II」 社会・歴史と性差 第10回 「現代」 1968年以後 第11回 質疑応答、ミニ・レポート作成 第12回 ミニ・レポートへの応答 第13回 「人間I」 なぜ答えは出ないのか 第14回 「人間II」 普遍をもたらすもの 第15回 「人間III」 新しい倫理学
授業外における学習/Independent Study Outside of Class	授業で予告された書籍や映像作品などをあらかじめ鑑賞しておく、授業内容の習得度が上がるので、望ましい。また「授業支援システムCLE」を通じて追加学習のためのコンテンツも配布する予定なので、利用して復習するとよりよい。
教科書・教材/Textbooks	なし
参考文献/Reference	檜山欽四郎『哲学概説』創文社、檜山欽四郎『哲学の課題』講談社学術文庫 野尻英一『意識と生命』社会評論社 高瀬堅吉・野尻英一・松本卓也編『自閉症学のおすすめ——オーティズム・スタディーズの時代』ミネルヴァ書房
成績評価/Grading Policy	レポート100%（学期途中で提出するミニレポートが20%、学期末に提出する期末レポートが80%の割合となる） 本講義は、ほぼ毎回出席して講義の流れを理解していないと合格点のレポート作成は難しい内容となっているので、留意すること。またレポートの提出はミニレポート、期末レポートと二回ある。
コメント/Other Remarks	授業の仕組みについて説明するので、初回講義に必ず出席すること。
特記事項/Special Note	本講義は、基本的にプロジェクタ画面に投影したスライドと配布資料（プリント）をもとに、授業を進める。配布資料については、CLE上でファイルを提供する場合がある。2回のレポート提出は、CLE上で行なう。
	この講義の続篇にあたる「比較文明学（学部）／

受講生へのメッセージ / Messages to Prospective Students

比較文明学特講（大学院）」を同教員が開講している。哲学、社会理論、精神分析の組み合わせにより近代性の本質を解明する講義である。上記①〈主観〉の次元から入るアプローチの続篇である。

また上記②社会・歴史の構造という〈客観〉の次元から入り現代文明の構造を理解するアプローチについては「社会理論（学部） / 社会理論特講（大学院）」で行っている。いずれも本講義を補完発展させる内容となっているので、興味のある学生はあわせて履修すると良い。

難易度は、おおむね、文明動態学（学部2年生向き）→比較文明学（学部3年生向き）→社会理論（学部4年生、大学院生向き）の順となっている。内容も発展的に連動しているので理解の面からもこの順での履修が望ましい。ただし学ぶ意欲があれば、どこから取ってもよい。

学生への注意書き